

## ドップラー併用の速度初期値が不要な TDOA

## TDOA with Doppler Measurements without the Initial Value of Target Velocity

小菅 義夫<sup>†, ††</sup>, 古賀 禎<sup>†</sup>, 宮崎 裕己<sup>†</sup>, 呂 曉東<sup>†</sup>, 稲葉 敬之<sup>††</sup>  
Yoshio KOSUGE<sup>†, ††</sup>, Tadashi KOGA<sup>†</sup>, Hiromi MIYAZAKI<sup>†</sup>, Xiaodong LU<sup>†</sup>, and Takayuki INABA<sup>††</sup>

† 電子航法研究所, †† 電気通信大

† Electronic Navigation Research Institute, †† University of Electro-Communications

## 1. はじめに

ドップラー観測値を併用する TDOA において, 従来とは異なり, 速度の初期値を使用せずに目標速度を推定する方法を提案する.

## 2. 距離差観測モデル

$i(i=0, \dots, n)$  番目の受信局 (固定位置)  $B_i$  及び目標位置  $L$  を,  $D^T$  は行列  $D$  の転置を表すとして, 次式で表す.

$$B_i = (x_i, y_i, z_i)^T \quad (1)$$

$$L = (x, y, z)^T \quad (2)$$

目標と  $i$  番目の受信局の距離の真値  $R_i$  は, 次式となる.

$$R_i = f_i(L) = \sqrt{(x_i - x)^2 + (y_i - y)^2 + (z_i - z)^2} \quad (3)$$

距離差観測値を  $R_{i0}$ , 観測誤差を  $v_i$  として次式を得る.

$$R_{i0} = R_i - R_0 + v_i \quad (4)$$

(性質 1) 位置推定初期値を  $L_0$  とすると, 次式を得る.

$$\Delta R_{i0} = R_{i0} - [f_i(L_0) - f_0(L_0)] \approx (\omega(i) - \omega(0))a_i + v_i \quad (5)$$

ここで, 次式を定義する.

$$\omega(i) = (L_0 - B_i)^T / f_i(L_0) \quad (6)$$

$$a_i = L - L_0 \quad (7)$$

すると, 次式を得る.

$$b_i = (\Delta R_{i0}, \dots, \Delta R_{n0})^T = A_i a_i + v_i \quad (8)$$

ここで, 次式を定義する.

$$A_i = \begin{pmatrix} [\omega(1) - \omega(0)]^T & \dots & [\omega(n) - \omega(0)]^T \end{pmatrix}^T \quad (9)$$

$$v_i = (v_1, \dots, v_n)^T \quad (10)$$

## 3. ドップラー観測モデル

目標速度ベクトルの真値を  $V$  とすると,  $i$  番目の送受信機間のドップラーの真値  $\dot{R}_i$  及び観測値  $\dot{R}_{io}$  は次式となる.

$$\dot{R}_i = h_i(L, V) = (L - B_i)^T V / f_i(L) \quad (11)$$

$$\dot{R}_{io} = \dot{R}_i + \dot{v}_i \quad (12)$$

$\dot{v}_i$  はドップラーのランダムな観測誤差である.

(1) 従来法 (Taylor 級数推定法)

(性質 2) 速度推定初期値を  $V_0$  とすると, 次式を得る.

なお,  $\alpha_{ii}, \beta_{ii}, \gamma_{ii}$  は線形近似の係数である.

$$\Delta \dot{R}_{io} = \dot{R}_{io} - h_i(L_0, V_0) \approx \kappa(i)a_i + \omega(i)a_v + \dot{v}_i \quad (13)$$

ここで, 次式を定義する.

$$\kappa(i) = \begin{pmatrix} \alpha_{ii} & \beta_{ii} & \gamma_{ii} \end{pmatrix} \quad (14)$$

$$a_v = V - V_0 \quad (15)$$

すると, 次式を得る.

$$b_d = (\Delta \dot{R}_{i0}, \dots, \Delta \dot{R}_{n0})^T = A_d a_v + A_d a_i + \dot{v}_d \quad (16)$$

ここで, 次式を定義する.

$$A_d = \begin{pmatrix} \kappa(0)^T & \dots & \kappa(n)^T \end{pmatrix}^T \quad (17)$$

$$A_i = \begin{pmatrix} \omega(0)^T & \dots & \omega(n)^T \end{pmatrix}^T \quad (18)$$

$$v_d = (\dot{v}_0, \dots, \dot{v}_n)^T \quad (19)$$

## (2) 提案法

式(11)において, 未知数である位置ベクトルの真値の代わりに初期値を使用すれば, 次式を得る.

$$\dot{R}_i \approx \omega(i)V \quad (20)$$

すると, 次式を得る.

$$d_d = (\dot{R}_{00}, \dots, \dot{R}_{n0})^T = A_d V + v_d \quad (21)$$

## 4. 観測雑音の性質

$E[\ ]$  は平均,  $\mathbf{0}$  は零ベクトル,  $D > 0$  は行列  $D$  が正値,  $O_{m,n}$  は  $m \times n$  の零行列を表わすとして, 次式を仮定する.

$$E[v] = \mathbf{0} \quad (22)$$

$$V = E[vv^T] = \begin{pmatrix} V_i & O_{n,n+1} \\ O_{n+1,n} & V_d \end{pmatrix} > 0 \quad (23)$$

ここで, 次式を定義する.

$$v = (v_i^T, v_d^T)^T \quad (24)$$

$$V_i = E[v_i v_i^T] \quad (25)$$

$$V_d = E[v_d v_d^T] \quad (26)$$

## 5. 距離差, ドップラーを使用した TDOA 測位, 測速

(1) 従来法

距離差と式(13)で線形近似したドップラーを使用した重み付き最小自乗法による

$$\hat{a} = (a_i^T, a_d^T)^T \quad (27)$$

の推定値  $\hat{a}$  は次式である.

$$\hat{a} = (A^T V^{-1} A)^{-1} A^T V^{-1} (b_i^T, b_d^T)^T \quad (28)$$

ここで, 次式を定義する.

$$A = \begin{pmatrix} A_i & O_{n,3} \\ A_d & A_d \end{pmatrix} \quad (29)$$

(2) 提案法

距離差と式(20)で線形近似したドップラーを使用した重み付き最小自乗法による

$$\hat{c} = (c_i^T, c_d^T)^T \quad (30)$$

の推定値  $\hat{c}$  は次式である.

$$\hat{c} = (C^T V^{-1} C)^{-1} C^T V^{-1} (b_i^T, d_d^T)^T \quad (31)$$

ここで, 次式を定義する.

$$C = \begin{pmatrix} A_i & O_{n,3} \\ O_{n+1,3} & A_d \end{pmatrix} \quad (32)$$

## 6. 性能比較

(性質 3) 従来法で速度が推定可能ならば, 提案法でも可能である. また, 提案法による速度推定誤差共分散行列は, 従来法以下である. ただし, 提案法による位置推定誤差共分散行列は, 従来法以上である.

## 7. まとめ

本稿では, 速度推定性能が改善可能なドップラー観測モデルを提案した.